

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 37

関西大学博物館彙報
平成10年9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



鶏形埴輪 Haniwa Cock

目 次

琅邪台—徐福伝説—	2
中国山西省平遙古城	4
伝統的工芸品入門—その2—	6
占領下日本の輸出商標—5—	8
『展示図録』にみる古代エジプト文化	10
平成9・10年度寄贈資料について	12
平成10年度関西大学博物館企画展 「縄文時代の狩猟と生活」報告	14
博物館だより	16

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-368-1171 (直通)

FAX 06-388-9928

琅邪台

—徐福伝説—

藤 善 眞 澄

平成9年度の文部省科学研究助成金による国際学術研究テーマ「中国華東・華南地域と日本の文化交流」にもとづき、昨年10月8日に関西空港より青島に飛んだ。同行者は高橋隆博・松浦章・藪田貫・内田慶市の4研究員である。白砂青松、華中以北では奇観ともいべき紺碧に近い黄海をひかえ、租界時代の名残りを彩濃く漂わせるドイツ風の佇みに、しばし時と場所の実感を喪失する。翌日その青島をあとに魯膠渡よりフェリーに乗り膠州湾口をひと跨ぎして対岸の黄島に渡り、膠南市さらに泊里鎮をへて念願の琅邪台遺址に向った。

黄海に突き出す半島状の琅邪山は古来、聖なる台地とされた山東の名山である。後漢の趙曄撰『吳越春秋』に、かの越王勾踐が呉を滅ぼして関東に覇をとくなえたとき「琅邪に徙りて觀臺を起つ。周七里、以て東海を望む」とあり、これをもとに勾踐が都を琅邪に遷したという伝承を生んだ。『吳越春秋』ばかりではない。『竹書紀年』や『漢書』地理志にもみえることから、六朝時代を通じてまことしやかな話として信じられていたものらしく、道元の『水経注』はおろか近人の作品にまで「徙都」物語が書きとめられている。

琅邪山が脚光を浴びたのは始皇帝の28年（BC219）、泰山に登って天をまつり梁父山に地をまつたあと、渤海ぞいに山東半島をめぐる成山（文登県）から之罘山（烟台市）をへて南下し、この地を訪れたときである。『史記』封禪書には東のかた海の上りに遊び、行りて名山、大川及び八神を礼祠り、僊（＝仙）人の義門の属を求む。

と記している。もともと山東を支配していた斉国に八神、つまり天主、地主、兵主、陰主、陽主、月主、日主、四時主の八柱神があり、天齊淵水を祠る天主、太山と梁父を祠る地主、蚩尤の兵主、三山の陰主、之罘山の陽主、成山の日主、之萊山の月主そして四時主を祠る琅邪山、そのどれもが神仙とゆかりの深い山なのである。

南のかた琅邪に登り、大いにこれを樂み留

ること三月、乃ち黔首三万戸を琅邪台の下に従し、十二歳を復（賦租免除）して琅邪台を作らしめ、石刻を立て秦の徳を頌え得意を明らかにす（始皇本紀）

始皇帝は翌年にも東巡して再び琅邪台を訪れており、「大楽山」の別號を生むほどに彼の興味と関心をそそったようである。今回この地をたずね、標高630メートルの山頂に登ったが、その眺望のすばらしさに暫し絶句、やがて感嘆しきりの数刻を過ごすことになった。始皇帝が巡遊した萊州湾に臨む海台（山東省濰県）や成山、之罘山を知らないのでは比較の仕様はないけれども、南北に走る海岸線を断ち切るように聳えたつ琅邪山の景觀は、筆舌に尽し難いといっても決してオーバーではない見事さである。



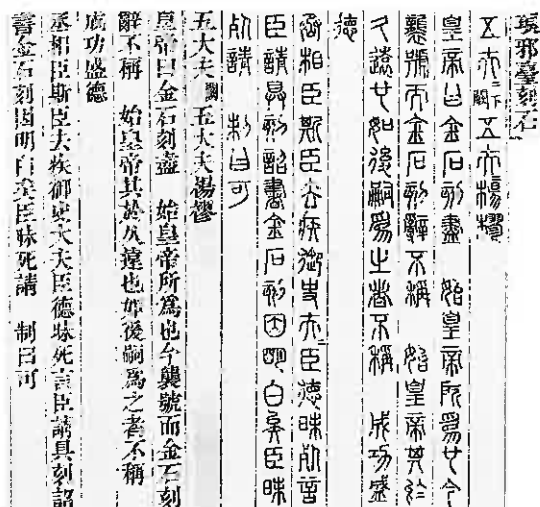
琅邪台より黄海を望む

3万戸、10万人を超える民百姓を強制移住させ、12年の租税免除を条件にしてまで築かせた琅邪台の面影はなく、各層3丈・3層からなる台はすでに崩落し、今は黄海を睨むレーダー基地と隣あわせの展望台に、始皇帝が齊の方士徐市（徐福）に三神山へ船出して仙人・仙薬を求めさせたエピソードにちなむ純白の「群彫像」14体が置かれている。『水経注』には「台上に、人間が穢そうものなら水は涸れてしまい、潔斎すると水が湧き出る神淵が有る」と記しているが、泉淵らしきものは見当たらない。

始皇帝の刻石はなく二世皇帝の胡亥が訪れた

時の13行、計87文字だけで、北京の中国歴史博物館に展示されてある。ただ司馬遷が採録してくれたお蔭で「維二十八年、皇帝作司始」にはじまる全文を目にする事が出来るのは、幸いというほかはない。

歴史博物館の琅琊台碑は一説(『齊道記』)によると、郡国制度や文字・度量衡の統一を立案し、また悪名高い焚書事件の張本人でもある李斯が刻したものだという。『史記』所録の文に「器械は量を一にし、書の文字を同じくす」など度量衡・文字の統一を賛美しているのをみると、あるいは妥当な説かも知れず、始皇帝の徳をたたえながら、その実、自分の功業を誇示しようとしたと門外漢らしい意地悪で勝手なことを考えながら全文を読んだ。趙明誠の『金名録』に



琅邪台刻石一金石萃編卷四

「琅邪台刻石は今の密州(諸城県)に在り、
 その頌詩は亡^{うしな}る。獨^ただ從臣の姓名及び二
 世(皇帝胡亥)の詔書は尚存す。然れども亦
 殘缺す。熙寧中、蘇翰林(蘇軾)の密^{おさ}に守た
 りしとき、廬江の文勛をして模搨し石に刻
 ましむ。即ち此の碑なり

と蘇東坡によって再刻された事実を伝えている。東坡が杭州通判であったとき、日本の僧成尋と交渉があった次第については論じたいけれども、その翌熙寧7年(1074)、密州刺史に転じたのである。少し後輩の趙明誠が伝えたものだけに間違いはなかろう。

『史記』には刻石を建てたあと徐市らが「大海中に蓬萊・方丈・瀛州の三神山があり、そこ

には仙人が住まわれているとか。自分らは斎戒し身を潔めて汚れない男女の童達をとめない、仙人をたずねたい」と上書したので始皇帝は数千人の童子・童女とともに徐市を大海中へ送り出したという有名な話が語られている。彼らが日本にたどり着き、紀州熊野浦つまり新宮市に上陸したとする徐福伝説は、日本の各地にひろがりをみせているが、中国では近年になって関心が高まり舟山列島の徐翁山に比定した研究者もいる。黄海へと北上する黒潮に乗り出したとすれば、黒潮とともに遡上し日本近海に達したとするもよし、山東半島に突きあたって反転し黄海を南下する潮流もあることとて、舟山列島に漂着したとする説もまた捨て難いのである。

琅邪台を語るとき忘れてはならない、もう一人の皇帝がいる。漢の武帝である。元封五年(BC106)冬、南のかた湖南省の蒼梧山、安徽省の天柱山をめぐり、長江に遊び琅邪に達した。2回目は太始三年(BC94)のことであり、東海郡をへて琅邪台そして成山に日出を拝み之罘山に登り、渤海湾に船を浮かべて帰還するという、ちょうど始皇帝とは逆の道順をとっている。3万戸の強制移住など始皇帝の巡幸があまりにも喧伝されたためか武帝のそれは影が薄くなってしまったようである。筆者なりに東海地域の開発をもくろむ一種の徙民政策であったと理解しているが、それを琅邪台築造に結びつけられるあたり、さすが始皇帝と嘆服せざるを得ない。

それにしても台址とおぼしきあたりに配された白亜の像14体は、もう少し方士らしい雰囲気をかもし出す工夫が欲しいもの。馬嵬駅の楊貴妃墓地に突然現われた楊貴妃像のけげげげさに啞然とした日の記憶をよみがえらせながら、いささかの老婆(翁)心をかきたてられることであった。



徐福に勅書を下す始皇帝像

中国山西省平遙古城

松 浦 章

1

ユネスコ世界遺産委員会第21回大会において中国の山西省に在る平遙古城が「世界遺産」に登録された事が『北京週報』1998年第3号(1月20日)で紹介されている。この平遙には1993年8月に訪問したことがあるので、その際の写真などを使い平遙及び近隣の祁縣の史跡を紹介したい。

2

中国では古くから城郭を保有する都城が造営されてきたが、今世紀になって各都市の市街区の拡大とともに壊され、多くはその城壁の跡地に道路が造られた。このため各都市の市内地図を見れば、少なくとも清代の城壁のあとと比較的簡単に知ることができる。北京、上海、天津においても同様である。しかし、近年旧時の城壁を保存する都市は極めて稀である。大都市では西安、南京などが比較的保存されている方であり、北京ではごく一部の門があった付近のみが若干保存されているだけである。それに対して現在も旧時の状態で保存されるのは「寧遠州から山海関へ」(『阡陵』NO.19、1989.5)においても紹介した東北の遼寧省の興城古城と、ここで述べる平遙古城が知られるのみである。中国國務院は1986年12月に平遙を国家歴史文化名城の一に指定している。

3

平遙縣は山西省の中部に位置し、山西省の省都である太原の南に位置し、東は祁縣、西は汾陽縣、南は沁源縣、北は文水縣に接して、西南方面は介休縣と隣接している。平遙に城壁が築かれたのは周の宣王(BC.827~782)の時代とされるが、現存の城壁のもとになっているのは明初のことで、

明の洪武三年(1370)に重修されている。現存の建築物では五代の北漢時期に建立された鎮国寺の萬佛殿などがあり、金の大定三年(1163)に重建された文廟の大成殿等の古い建築物も残されている。平遙古城の城跡は周囲十二里、高さ三丈二尺と言われ、周囲約6K、高さ10mに及び城壁をほぼ完全に保存している(写真1:平遙城壁の一部)。

1915年の上海東亜同文書院第十三期生の調査では、

平遙は太原の西南、百九十支里、潼関、太原間の要路に当り、汾州の東南八十支里の地に在り、一帯は汾河の平原にして北に中都水、南に豪門水の流水あり、(1)

とし、西安の東にあって陝西省の東部への重要な位置にある潼関と山西省の省都である太原を結ぶ重要な交通路の要所に平遙は位置している。さらに、同書に見える同時期の調査では、

城壁は高さ二丈五尺、東西及び南北長さ各五町、煉瓦を以て築く、城門五、東西南に各一門、北に二門あり、道路の最大なるは南北街路にして幅二間敷石せり。(2)

と記している。

この平遙には中国全土に名を馳せた店があった。それが票号と言う一種の金融機関を誕生させた店の旧居が保存されている。それが日昇昌票号(写真2:日昇昌記旧居)である。日昇昌



写真1:平遙城壁の一部



写真2：日昇昌記旧居

票号の前身は「西玉成」と言う顔料行、すなわち顔料専門店であった。道光四年（1824）に日昇昌票号が全国に先駆けて匯兌と呼称した為替を取り扱う金融業務を開始し瞬く間に各地に普及し、近代的金融業が中国に普及する20世紀の初めまで、上海を中心とした両替を中心とする銀行業を兼ねた錢莊業と名を競ったのである。この票号が明清時代に活躍した山西商人の後裔としてみられたのである。票号を創始した日昇昌票号は「天下第一号」とも別称された。平遙には日昇昌票号を初めとして有名な十票号が知られ、その旧居が平遙城内に保存されている。

平遙の近郊の祁縣には、山西商人の豪邸として知られる「喬在中堂住宅」（写真3・4：喬在中堂住宅内）がある。ここでは一部旧中国の人々の生活を人形で再現した展示もしていて興味をそそられる。この喬在中堂の名は喬全美から起こる。喬全美の父喬貴華は帰化城（現・内蒙古自治区のフフホト）で雍正年間には商人として

活躍し、その第三子が喬全美で在中堂と呼ばれ、喬貴華三子の中で資本金力が最大の商人に成長した。喬家は大徳通と大徳恒の二つの票号を創始し、喬三兄弟の共同経営で特に喬在中堂の出資額が最多額で、後に在中堂が全資本金を占めることになる。(3)

この「喬在中堂住宅」は中国映画の第五世代の俊英チャン・イーモウ（張芸謀）が監督し中国人女優コン・リー（鞏俐）が主演してベネチア映画祭で銀獅子賞を受賞した1991年香港・中国合同で作られた映画「紅夢 Raise The Red Lantern」（原題：大紅燈籠高高掛）の舞台にも使われた。映画ではこの豪邸の様子が様々な場面で見られ、山西商人が如何に蓄財したかの端的な具体例としても見る事が出来る。このような「喬在中堂住宅」が今日においても保存されていることの意義は大きい。

4

このように、平遙古城及びその近郊の祁縣は旧時代の姿を保存しながら、人々はその城内及び周辺で生活を営んでいる町であり、明清時代の中国の人々の生活環境を具体的に知らしめてくれる貴重な場所と言える。

〔註〕(1)(2)『支那省別全誌第十七卷山西省』東亜同文會、1920年9月、88頁。

(3)『山西票號史料』山西人民出版社、1990年10月、785～786頁。

【参考文献】『国家歴史文化名城—平遙』(山西省平遙縣史志弁公室、1987年10月)、祁耆・武殿琦『在中堂—喬家大院』(山西人民出版社、1993年3月)。



写真3



写真4

喬在中堂住宅内

伝統的工芸品入門—その2—

角 田 芳 昭

わが国の「伝統的工芸品」について注意してみると意外にも多数の資料を収集することができた。何気なく開いた平成10年2月27日付毎日新聞に創刊特集として10・11面に伝統的工芸品が紹介されていた。「歴史が育てた匠の技・未来へバトン確実に」の見出しで、近畿の「信楽焼」(滋賀)「備長炭」(和歌山)「高山茶釜」(奈良)「西陣織」(京都)「灘五郷」(兵庫)「堺刃物」(大阪)の6件が載っており、良い企画であった。シリーズ物として近畿地区における伝統的工芸品を取材し、日本の心を伝えてほしいものだ。

更に書店にも足を運び見つけ出したのが、「伝統的工芸品への招待」(大蔵省印刷局発行・平成8年11月)であり、施設ガイドブックとしては非常に有益な書物である。まず「伝統産業会館」「資料館」「工芸館」などが収録され、専門学校、定期的な展示室の案内などもあり、また工芸品一覧として、第1次指定品目より30次指定(平成8年)までの全製品をカット写真入りで収録している。また全国各地で行なわれる主要展示会期なども盛られている。

第1次・2次指定については第36号(平成10年3月号参照)に書いたので参考にされたい。第3次指定品目は「小千谷縮」(新潟県)「小千谷紬」(新潟県)「飯山仏壇」(長野県)「高岡漆器」(富山県)「有松・鳴海絞」(愛知県)「信楽焼」(滋賀県)「大阪欄間」(大阪府)「弓浜紬」(鳥取県)であり、昭和50年9月4日付8品目であった。続いて4次指定は昭和51年2月26日

付次の11品目である。「樺細工」(秋田県)「置賜紬」(山形県)「松本家具」(長野県)「村上木彫堆朱」(新潟県)「京鹿の子絞」(京都府)「西陣織」(京都府)「京仏壇」(京都府)「京仏具」(京都府)「京漆器」(京都府)「香川漆器」(香川県)「博多人形」(福岡県)第1次指定で6件の染・織物がある。日本の様々な風土が映し出される染と織、日本人の繊細な服飾感覚が凝縮されている。京都の「西陣織」といえば華麗で晴着向き、八丈島の特産「黄八丈」は素朴な趣で普段着にも愛用される。「紬」「上布」「絰」「友禅」「縮」「絞」など織物の種類がある。「村山大島紬」は日本三大紬のひとつに数えあげられる民芸紬で素朴さのなかに上品な奥ゆかしさ、柔らかな温かみが加わり、心なごませる風合いを醸し出している。武蔵野の織物諸技術が生んだソフトな傑作といえる。文化年間(1804年)頃より十字絰の織物を農閑期の副業として織りはじめたのが始まりと伝えている。養蚕や綿作が盛んな土地で、藍の生産も活発であったので、江戸で大量に消費され、全国に行きわたるようになった。村山大島紬は特に軽くてしわになりにくい特性があり、柄行きもあきがこないものをつくり、アンサンブルとして多く利用されている。通信販売なども行なわれている。主要製造地域は東京都立川市、青梅市、昭島市、東大和市、武蔵村山市、埼玉県飯能市などである。

次に指定の4号は「塩沢紬」で、18世紀後半、越後上布の絰や縞の模様付け技法を絹織物にとり入れて創製された。擦り込み、くくり作業に



村山大島紬の商標



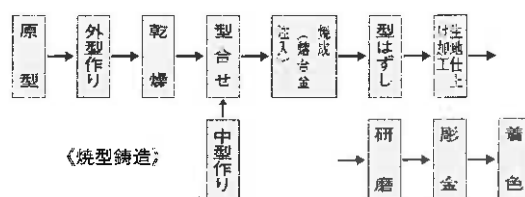
塩沢紬の商標

よる蚊餅と呼ばれる細かい十字餅や亀甲餅により構成された餅模様が、独特の上品さと落ちつきをかもし出している。江戸時代後期には塩沢の餅織と絹縮（本塩沢）として全国に知れ渡った絹織物の産地だった。京都、東京、大阪、名古屋などの集散地問屋へ受注生産で出荷され、デパート、呉服専門店で販売されている。伝統工芸士に昭和55年12月に認定された「樋口ハルヨ」さんは十日町高等職業訓練学校塩沢分校織布科で指導されており、「自分が織った物はこの世の中にたったひとつしかないという誇りが、何より必要なんです」織ることが好きで話す間も手は少しも休めず、精緻な小餅を織られていく。樋口さんの織られた紬が全国の愛用者に着られているのである。今後も健康で活躍されてほしいものだ。

次に「高岡銅器」をみてみたい。17世紀初、加賀前田藩の育成により始まり、花器、仏具等の鑄物に彫金を主体とする唐金鑄物を作り出したことにより発展した。唐金は銅、亜鉛、鉛、すずの合金で、柔和な渋みがあり、多彩な工法によって仕上げられる。専門の着色師が色づけし雅趣ゆたかな意匠、天然うるしやおはぐろを使った着色方法は他産地では見られない独特の技法で、多くの注文がある。「香炉」製作は他産地を凌駕しており、日本各地の床の間に飾られている。銅鑄物の品種は数千種にも及んでいるといわれている。今後ますます需要があるものと思われ発展することを祈るものである。



高岡銅器
一花入



参考文献

『伝統工芸士名鑑』昭和61年 ふたば書房発行
『伝統工芸品名鑑』昭和58年 サンケイ新聞年鑑局発行

占領下日本の輸出商標— 5 —

—動物意匠のみられる商標—

山口 卓也

1 占領下日本の輸出商標の意匠には、GHQ統制下の日本繊維商社名義や相手先名義のOEM商標などがあり、さらに輸出先国の宗教や風土・風俗、購入対象者層などに対応した、多様な種類が認められることは、前回までに紹介してきた商標の中に十分窺えるであろう。今回は動物意匠のある輸出商標をいくつか紹介したい。商標の縮尺は約60%である。

2 第1図は色彩の鮮やかな商標で、椰子にニシキヘビが巻き付く図を配した東洋棉花株式会社の商標である。人ではなく蛇を使っているこの絵の描れた社会的背景を観察すると、人物を絵として示すことに宗教的抵抗のある中東などのイスラム圏向けとの推測も成り立つ。

この商標は生産国表記が「MADE IN JAPAN」となっているが、まったく同じ図で少し大形の商標が別に存在し、これに「MADE IN OCCUPIED JAPAN」となっているものがある。



第1図

り、これらは輸出統制の緩和される端境期の商標であるかもしれない。

第2図は、剣を持ったライオンの図をあしらった商標で、「RISING SUN」「LION WITH SWORD」とある。人物ではなくライオンをあしらったことは、やはりイスラム教の宗教的禁忌に配慮した商標であろう。

下段には「HAJEE MAHOMED」「HAJEE MAWJEE」とあり、メッカ巡礼者二人の経営するアラビア半島のイエメンの港湾都市アデン所在の会社の商標である。HAJEEは、メッカ巡礼経験者への尊称であるが、宗教的誠実を示すことによる商品信用の向上を期待した明記なのであろうか。

この商標は、印刷後に複数枚重ねて切り離したままになっていて、少なくとも5枚の商標がインクで重なって張り付いている。

第3図は、ウサギ2匹が笛と太鼓をキャベツ畑で演奏している図をあしらった商標である。「JAVA」「SUMATRA」「BORNEO」



第2図

「CELEBES」といったインドネシアの島嶼名がみえる。

絵枠の上には、「HARMSSEN VERWEY & DUNLOP N.V.」とあり、本社の所在地ははっきりしないが、インドネシア向けの宗主国オランダ系会社の商標であると推定できる。地名にはインドネシアの島の名前があるものの、商標の絵とレイアウトはヨーロッパ的であり、ウサギと楽器、キャベツ畑といった絵柄も宗主国側に下絵があるのであろう。

インドネシアは、1950年にはオランダから独立しており、それ以前にオランダの植民地支配の続いている時期の商標であろう。

第4図は、猫の大小2匹がボクシングをしている絵柄の商標である。大猫が縞柄、小猫が斑（三毛?）である。小猫の尻尾が短いことから、日本猫を思わせる。大猫は、やや顔が大きいが、



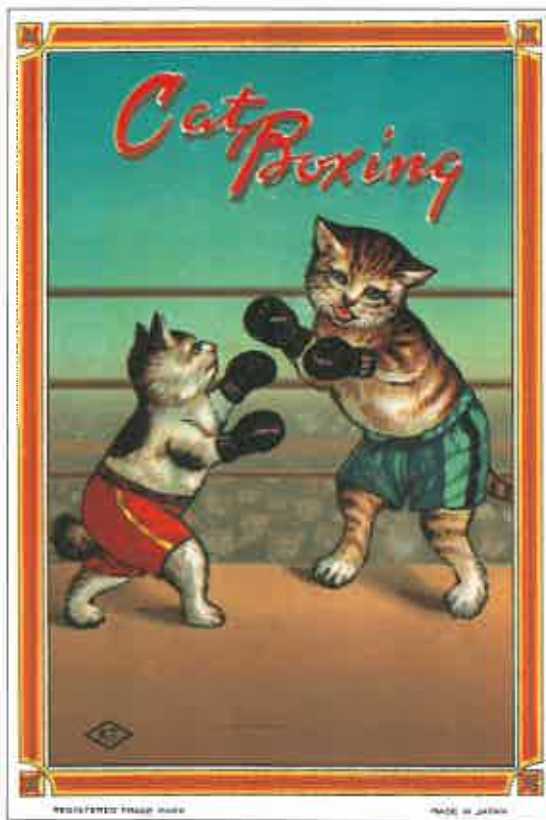
第3図

尻尾が長く描かれており、洋猫風である。リングサイドには多数の猫が観戦している。標題として、そのまま「Cat Boxing」とある。

左下には菱形に「KT」と社名略号、欄下には「MADE IN JAPAN」とあり、日本の輸出商社のものと判別できる。絵柄として動物を選んだのではなく、動きがあって、一見楽しそうな絵柄であるので、むしろボクシングの盛んな欧米向けである可能性のほうが高い。

一方、見方をかえるならば、意図的に大小・優劣のある猫の拳闘選手を描くことにより、弱者への感情移入をねらった絵柄のようにも見られる。もし、小猫が日本猫、大猫が洋猫であるとなると、輸出先では猫の種類は判別できないと思われるので、いわば日本人絵師の秘められた「意趣返し」であったかもしれない。

3 今回取り上げた輸出商標の動物は、宗教的禁忌に対した第1・2図、宗教的禁忌のある植民地に対して、宗主国の下絵をもとにしたと推定される第3図がある。また日本の商社商標で、敗戦・占領、強大なアメリカによる占領下に統制を受ける日本の存在を暗喩するように描かれたものが第4図である。第4図を作成した日本人絵師の意識が興味深い。



第4図

『展示図録』にみる古代エジプト文化

道 前 博

およそ5000年前、アフリカ大陸東北端、ナイルの渓谷に寄り添うように誕生した古代エジプトの文明に、人々はなぜこうも心惹かれるのだろうか。

外国人とエジプト文化の接点は、第2中間期のヒクソス侵入（紀元前1700年頃）にまで遡るが、エジプト文化に強い関心を持ち、文字によって記録したのは紀元前450年頃、ギリシャの歴史家ヘロドトスが最古であろう。その後、ローマをはじめとするこの地の支配者達によってエジプト文化が研究され、十字軍の遠征、イエズス会宣教師の布教と続くなかで、ヨーロッパ諸国において度々エジプトブームが起こった。近世では、「エジプト学」の始まりといわれる1798年からのナポレオンのエジプト遠征と、その結果もたらされたシャンポリオンのヒエログリフ解読という成果によって、エジプト熱は大きな高まりを見せた。今世紀に入ると、1922年ハワード・カーターのツタンカーメン王墓の発掘があり、「ファラオの呪い」とともに世界中の耳目を集めた。

我が国においては江戸時代の末期、幕府の遣欧使節団が途中エジプトを訪れ、ギザのスフィンクスの前で記念撮影をしたことが記録として残されている。第1次世界大戦直後には、大原孫三郎氏（大原美術館創設者）の委託を受けた児島虎二郎氏が欧州で古代エジプトの美術品を蒐集している。本学の故木村健助名誉教授も大正時代末ヨーロッパ留学の往路、カイロ博物館とギザのピラミッドを見学されたことが、名誉教授加藤一朗先生の著述（『肝陵』No.11）の中に見受けられ、当時の日本人もエジプトの文物に少なからぬ興味を持っていたことが窺える。しかしながら、日本においてエジプトブームが高まるのは、昭和38年の「エジプト美術五千年展」と昭和40年の「ツタンカーメン展」開催以後のことであろう。それまでのエジプトは、はるか彼方の地であり、大多数の人々にとって砂漠とピラミッドとミイラのイメージしかなかったが、これらの展覧会の開催によって華麗な黄

金文化と洗練された美術様式が日本人を魅了し、エジプトとその文化に対する認識を大きく改めさせることになった。

今日、ナイルの谷から発掘された夥しい品々は、世界各国の博物館施設に収蔵されており、各々の地でエジプト文化の片鱗に触れることができる。古代エジプトの資料を多く所蔵している施設としては、当地のカイロ博物館を除けば大英博物館とルーブル美術館が双璧であるが、後掲する欧米の博物館・美術館のエジプトコレクションも非常に充実している。日本においても、所蔵数は欧米に比べることはできないが、東京国立博物館をはじめ古代オリエント博物館、ブリヂストン美術館、大原美術館オリエント室等各地の博物館施設に優れたエジプト資料が収蔵・展示されている。関西大学博物館にも、古王国時代からコプトの時代まで、ヒエログリフの刻まれた碑文断片や青銅製オシリス神像、ファイアンス製護符、スカラベ、玉製品、前述の木村健助先生から加藤一朗先生を経て寄贈を受けたウシャヴティなど40点余りを所蔵し、展示している。



オシリス神像

さて、冒頭にも述べたとおり、なぜ世界中の人々がこのように古代エジプトの文化に魅力を感じるのか、近年日本の各地で毎年のように開催されている「古代エジプト」をテーマとした

展覧会の『展示図録』に記されている「あいさつ・メッセージ」から主催者の企画意図を探り観覧者のニーズがどこにあると捉えているのかを紹介してみたい。

展 覧 会 名	開催期間	開 催 場 所	資料所蔵館	展示図録「あいさつ」
ツタンカーメン展 Tutankhamen Exhibition	1965. 8. 21 } 12. 26	東京国立博物館 京都市美術館 福岡県文化会館	エジプト 博物館	「黄金のマスクや黄金張りのベッド・玉座に使われた椅子など、今まで考えられなかった貴重なものが出品された。」
古代エジプト展 The Exhibition of The Tresures of Great Kings and Queens of Ancient Egypt	1978. 4. 1 } 12. 3	東京国立博物館 福岡県文化会館 京都市美術館 名古屋市博物館	エジプト 博物館 ルクソール 博物館	「王と王妃たちの栄光とロマン、壮麗な文化を物語る秘宝、ラムセス大王の巨像、王妃の胸像、黄金の装身具等の展示により古代エジプト美術の優れた全容を知る。」
エジプトの美 Neferut Net Kemit Egyptian Art from The Brooklyn Museum	1983. 9. 15 } 1984. 3. 18	伊勢丹美術館 阪神百貨店 佐賀県立美術館 鹿児島県歴史資料 センター	ブルックリ ン美術館	「王朝以前からローマ時代までの彫刻、浮き彫り、副葬品、装身具他の逸品で、ナイル河がはぐくんだ4000年の文化を一望する。」
黄金のファラオ展 Golden Pharaoh Kings in Pharaoh's Land	1985. 7. 19 } 8. 11 (神 戸)	神戸エキゾチック タウン・バンドー ル他全国8都市	カイロ 博物館	ブトレマイオスⅠ世の「黄金のマスク他古代エジプトに君臨した王、ファラオに関するものを中心に選り展示する。」
大エジプト展 The Exhibition of Art Tresures of Ancient Egypt	1988. 4. 26 } 1989. 1. 29	東京国立博物館 京都国立博物館 広島県立美術館 福岡市美術館 エンドーチェーン 仙台	ベルリン 国立博物館 (ボーデ博 物館)	「神々・王・役人・日常生活・死の世界のテーマに分けて展示する。」「エジプト美術の特色の一つである巨像指向を感得できるようオベリスクや石棺など大型石造物を可能な限り多数展示する。」
古代エジプト展 Life and Death under Pharaohs	1996. 12. 26 } 1997. 11. 16	熊本県立美術館 山口県立萩美術館 大丸ミュージアム 梅田、岐阜市歴史 博物館、金沢名鉄 丸越、三越美術館 新宿、浜松市美術 館、五番館西部	ライデン 古代博物館	「人々の営み、思想の結晶ともいえる副葬品を中心に美術的にも極めて価値の高い遺宝により、古代エジプト人の生活や死生観を当時のファラオや官吏から一般の人々まで広範囲に捉え紹介する。」



古代エジプト展図録

平成9・10年度寄贈資料について

米 田 文 孝

一復元銅鐸の寄贈一

1998年6月、関西大学博物館は東大阪市に在住される上田富雄氏から、復元銅鐸の完成品2点と鑄造工程を段階的に示す半製品4点の寄贈を受けた。

上田氏は主として船舶用バルブを製造・販売する鑄物会社を営んでいる。復元銅鐸の製作に着手された直接的な動機は、かつて新聞報道である博物館に納入される復元銅鐸が完成したとの記事を目にしたとき、非常に精巧にできたというその銅鐸が、樹脂製であるということに疑問を感じたことが原点であると拝聞した。その後、島根県加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸を実見される機会を得られ、弥生時代の高度な鑄造技術に挑戦する気持ちがより一層昂進した結果、試行錯誤の中で復元実験を開始されたという。これには、一万人に一人の名工といわれ生涯現役を貫いた、亡父譲りの鑄物師の血が騒いだことも遠因となっているのであろう。

なお、関西大学博物館にこれらの貴重な資料が寄贈される経緯には、本学文学部史学科を1961（昭和36）年に卒業された森上修氏のご尽力がある。森上氏は上田氏と、中学・高校と机を並べて学ばれた関係であり、関西大学に進学された後は故末永雅雄先生の薫陶を受けられた

という。このように、今回の復元銅鐸の製作が具体化するにあたっては、関連業種的朋友や島根県教育委員会の方々はもとより、先の森上氏をはじめとして各界で活躍される中学～大学時代の同級生が、惜しめない援助・協力をされた結果と拝聴した。

さて、今回の復元実験のモデルとして選択された銅鐸は、1996年10月14日、農道工事中に39個体が偶然発見された、島根県加茂岩倉遺跡出土35号鐸である。このⅢ-2もしくはⅣ-1型式に比定できる35号銅鐸は全高46.5cmを測り、36号銅鐸と入れ子状態で出土した。鐸身には三縦帯・三横帯を田の字形に交差させた四区袈裟襷紋が施され、帯の中は斜格子紋で満たされている。A面上区には23号銅鐸と類似するシカと四脚獣、同じくB面上区には18号銅鐸と類似するトンボが、下区にはいずれも四頭渦紋が描かれている。これらの3個体は、紋様の類似性から、同じ工人集団の製品と推定されている。また、鐸には飾耳が一对あり、鈕部片面の菱環頂部には鑄造後に施された「×」の刻線がある。

なお、弥生時代の銅鐸は時期・地域により石型や砂(土)型を使用して鑄造されたと考えられているが、今回の復元銅鐸では本業との関係で広義の砂型を用いて製作された。また、その素



第1図 寄贈銅鐸



第2図 復元銅鐸2点



第3図 銅鐸鑄造工程資料



第4図 銅鐸鑄型（砂型）



第5図 鍍銀の付いた未成品

材には、銅とスズを90%：10%前後の比率で混合した青銅の一種、いわゆる砲金を基本にして、経験的法則と出土遺物の化学組成を参考に、鉛を加えた合金（銅80%、スズ15%、鉛5%）を使用している。鉛を添加する目的は展性を増進し、特に広く薄い身部に溶解した青銅（湯）を行き渡らせるためである。その後、さらにリンをごく微量添加するが、これにより薄い身部の裂断が防止されるという。出土遺物の実例として、神庭荒神谷遺跡から出土した銅鐸（6個）の場

合、その化学組成は平均値で銅77.9±2.8%、スズ12.6±3.5%、鉛4.3±2.1%である。

なお、現状で復元銅鐸は総重量や鑄部の厚みなどの諸点で弥生銅鐸に及ばないが、この法量（中型品）の銅鐸が鑄造できれば、技術的に大型品や小型品の鑄造は容易であるという観点から、あえて鑄造がもっとも困難と予測された一群に含まれる35号銅鐸を選択されたという。

最後に、復元実験を参観した直接的かつ未整理な印象からみると、例えば高火力かつ高温を維持できる燃料や溶解炉の問題、湯を注いだときに生ずるガス圧に対する用具・設備をはじめとして、銅鐸の鑄造には想像以上に大がかりな道具立が必要である。当然のことながら、廃絶後における自然的・人為的な消失というものを視野に入れなければならないが、この観点からは銅鐸生産に関連したと推定されている遺跡・遺構とも、各機関・担当者の精緻な調査にも関わらず、必ずしも断定的な要件が充足されている事例ばかりではない現状であろう。

このような復元銅鐸にかかる具体的な鑄造過程の詳細や、考古学的な視点からの検討などについては別稿で検討・報告する予定であるが、いくつかの興味深い問題点に一定の方向性を見だし遺例の調査・研究に還元すべく、さらに上田氏の復元実験が有意義な成果を生むように、関係者の方々と微力を尽くそうと考えている。

【引用・参考文献】

- 松本岩雄・足立克己ほか『出雲神庭荒神谷遺跡』
島根県教育委員会 1996
吾郷和宏・熱田貴保・難波洋三『加茂岩倉遺跡
発掘調査概報Ⅰ』加茂町教育委員会 1997
島根県教育委員会・朝日新聞社『古代出雲文化
展』島根県教育委員会・朝日新聞社 1997

一前漢長安城出土瓦当の寄贈一

1998年3月、本学名誉教授、下間頼一先生と同工学部助手の緒方正則氏より、関西大学博物館に前漢長安城出土の図象および文字瓦当合計6点の寄贈を受けた。

4点が図象瓦当で、直径約12cmを測る。鮮明ではないが四神が型押しされており、青龍文、白虎文、朱雀文、玄武文が施されている。一般



第6図 四神瓦頭

第7図 「長生無極」銘瓦

第8図 「衛」銘瓦

に、瓦当は雲文や葵文が多く、吉祥文は重要な要所に使用されるものであるといい、四神瓦当は当時の礼制建物の要所に使用された可能性が考えられるという。残り2点は文字瓦当であり、ひとつには「長生無極」、もうひとつは「衛」とある。

下間頼一・緒方正則両氏によれば、四神の図象瓦当は長安城南郊の礼制建物からの出土した可能性があるという。「長生無極」銘をもつ瓦は未央宮2号遺址周辺、同じく「衛」銘をもつ瓦は未央宮南西角楼にあったとされる衛戌関係の

建物からの出土が推測できる。

前漢の首都長安城は、当時の推定人口約10万弱の中国最大の都城であった。1951年より発掘調査が続けられている。この都城内の礼制建築は中国建築として進歩したもので、秦漢時代にすでに完成しつつあったことを示し、中国建築史上重要である。

【引用・参考文献】

下間頼一・緒方正則「四神瓦当等の前漢長安城出土瓦当」『関西大学博物館紀要』第4号
関西大学博物館 1998

平成10年度関西大学博物館企画展 「縄文時代の狩猟と生活」報告

関西大学博物館では、平成10年度企画展として「縄文時代の狩猟と生活」を平成10年4月6日（月）から5月16日（土）までの41日間、博物館第2展示室にて開催しました。また、4月5日には特別開館日を設けました。

期間中、2,776名の入館があり、大変盛況でした。本学学生や地域住民の多数の入館があったほかに、吹田市域の小学校児童も数校の団体見学があり、縄文時代の石器や土器などの展示品に、「教科書の写真と同じだー」との声があがっていました。

また、企画展に連動した博物館講座を5月9日（土）午後2時より行ないました。前館長網

干善教名誉教授による「縄文時代の考古学」と本館学芸員による「縄文時代の狩猟と生活」の講演があり、118名の参加がありました。最近の縄文時代考古学の成果についての講演を興味深く聴講されていました。さらに、多くの方が講演後、展示を観覧されて盛況でした。

今回の展示では、特に縄文時代人の行った狩猟・採集活動と、それに支えられた彼らの生活に焦点を当て、特に、関西大学博物館収蔵資料のうち、普段展示していない縄文時代の関連遺物を展示しました。骨や角、貝殻といった自然遺物を多く展示したため、通常の展示とは異なった雰囲気になったようです。また、関西大学

考古学研究室で調査した縄文時代・旧石器時代遺跡の資料についても展示しました。

展示の中で、特に注目を集めたのが、石鏃が刺さったままの猪頭骨と糞石でした。

猪頭骨（第1図）は、宮城県気仙沼市瀬澤出土で、イノシシ頭骨の額に有茎石鏃が突き刺さったままになっています。頭骨の後ろと下半部は打ち壊されているので、頭骨の内部を食べた痕がありますが、額に刺さった石鏃は、わざと抜かずにいたようです。鼻の上には、横に石器による削り傷が付いており、仕留めた後に毛皮を剥ぎ取った痕跡を示しています。この頭骨は、現代の棲息猪と比べてずいぶん大きいので、狩で得た大猪の頭を祭ったあとなのかもしれません。狩猟者が獲物に敬意を払い、頭骨を飾ったのでしょうか。

糞石（第2図）は、人の糞が化石化したものと思われます。カルシウムの多い土壌などに速やかに埋没するなどして、運良く残ったものなのでしょう。縄文時代が狩猟採集の時代で食生活が、現代人と大きく異なっていたため、排泄された糞の見かけも大きく異なっています。現代日本人の糞の形状は、米などの穀物食の多さから、保水効果があって、連続して排泄されていますが、縄文時代人の糞は、肉食や粗繊維食が多く、糖質食が少なかったという成分上の違いがあり、ある程度分割されて排泄されています。この形状の異なっている点が、縄文時代の「健康食」の証拠だと、来館者の興味を引いたようです。

展示解説の際、これを分解して顕微鏡観察すれば、何を食べたか、どんな病気だったかなどが解るという説明を聞いた小学生来館者は、縄文時代人の食生活と、子ども達の生活に糞石を見ながら、思いを馳せていました。

さらに、石器や土器には、何に使ったのか解らない見事な加工を施してある物があることを、石棒や石刀、注口土器や土偶を展示しました。これらを作るのにどれだけの時間が必要であるかを考え、縄文時代人の生活に、大変な時間的ゆとりがあったことを見ていただきました。現代人と縄文時代人とは、時間や名誉、地位、財産についての考え方が、大きく異なることが読みとれます。年輩の入館者には、感慨深かったようです。



第1図 石鏃の貫入した猪頭骨



第2図 糞石

今回の展示では、縄文時代人の狩猟と生活に関係して、生業活動に関係する道具類や土器・石器を展示しました。また、食料遺物の展示を行い、生活と物質的な環境が、彼らの精神世界にどう関係しているかを、描き出そうと試みました。展示できた資料の制約から、十分その広がりを出すことはできませんでしたが、狩猟や生活についての最近の縄文時代考古学の成果の一端を示しました。当時の人々の考え方、時間の使い方までが、少しずつでも解明されてきていることを、来館していただいた方々にお見せできたとしたならば、幸いです。

博物館だより

◇平成10年度 博物館企画展
「縄文時代の狩猟と生活」

期 間 平成10年 4月6日(月)
～5月16日(土)

場 所 博物館第2展示室

◇平成10年度 博物館講座

日 時 平成10年 5月9日(土)14時～16時

場 所 新関西大学会館ホール

内 容 「縄文時代の考古学」 関西大学名誉教授 網干 善教
「縄文時代の狩猟と生活」 関西大学博物館学芸員 山口 卓也

◇平成10年度 考古学入門講座の詳細は下記のとおりです。



企画展を見学する小学生たち

平成10年度 第9回『考古学入門講座』考古学から見た家と集落

	月 日	講 演 テ ー マ	講 師
第1講	10月31日(土)	考古学から見た家と集落	網 干 善 教 関 西 大 学 名 誉 教 授 関西大学飛鳥文化研究所長
第2講	11月7日(土)	弥生・古墳時代の家と集落	米 田 文 孝 関 西 大 学 文 学 部 助 教 授
第3講	11月14日(土)	先史時代の家と集落	宮 野 淳 一 大阪府立弥生文化博物館 学芸員
第4講	11月21日(土)	平城京の街と家	西 崎 卓 哉 奈良市埋蔵文化財調査 センター調査第一係長
第5講	11月28日(土)	住まいの原感覚をさぐる	森 隆 男 尼崎市教育委員会歴史博物館 準備室学芸担当係長

編集後記

『肝陵』第37号をお届けします。執筆して
いただきました先生方に感謝申し上げます。

また、本文にありますように、下間頼一名
誉教授・工学部緒方正則助手より瓦当6枚、
上田合金株式会社様より復元銅鐸及び鑄造工
程資料をご寄贈いただきました。

厚くお礼申し上げます。

表紙は「鶏形埴輪」です。頭部と頸部のみ
で胴体を欠いていますが、まっすぐに立った
顔は鶏ののびあがった姿態をよくとらえてい
ます。

残存長は約21cmで、愛媛県大洲市久米町小
学校校庭より出土したものといわれ、昭和15
年9月27日付けで重要美術品に指定されてい
ます。

関西大学博物館彙報 No.37 平成10年9月30日 発行

関西大学博物館 編集

ナニワ印刷㈱ 印刷